

IAUD Newsletter vol.8 第11号(2016年3月号)

- 1.活動報告:研究部会アリゾナ州立大学とのUD共同ワークショップ開催.....1
- 2.IAUDアワード2015受賞紹介③.....5
- 3.第6回国際UD会議2016プレイベント開催のご案内.....18
- 4.IAUD3月の予定.....19

幅広いメンバーで多様性について深く体感し議論

活動報告:研究部会 アリゾナ州立大学とのUD共同ワークショップ開催

研究部会は2015年9月1日(火)から3日(木)の3日間、東京都内と京都市において、アリゾナ州立大学 Takamura 研究室と会員企業によるUD共同ワークショップを実施しました。

このワークショップは、アリゾナ州立大学の Takamura 准教授とデザインを学ぶ13人の大学院生の来日に合わせて実施したもので、移動空間PJとメディアのUDPJのメンバー、会員企業メンバー、京都工芸繊維大学久保研究室が参加し、UDについて2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えた有意義な議論が行われました。

今号のNewsletterでは、3日間のワークショップの様子を研究部会部会長の木暮毅夫氏が報告します。

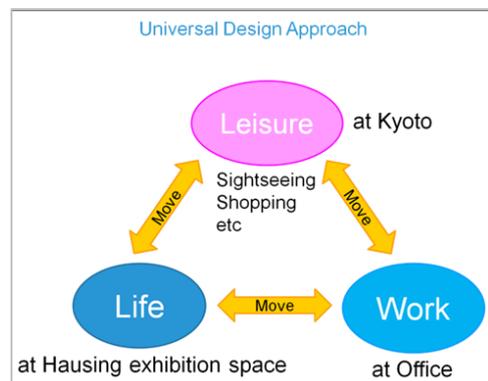


ワークショップ参加者で記念撮影

アクティビティと移動の観点からUDを考える

今回のUD共同ワークショップでは、「人」を中心に「暮らす(Life)」「働く(Work)」「それ以外(Leisure)」というアクティビティと、それらをつなぐ「移動(Move)」という観点からUDを考える、というフレームワークを企画しました。

そして、「移動」「ワーク/ライフ」「レジャー(観光)」をテーマに、多様性の視点でフィールドワークを行い、気づきを抽出する3つのワークショップを実施しました。



ワークショップのフレームワーク

1 日目:移動ワークショップ

- ・対象フィールド: 公共空間(有楽町-豊洲-新橋-六本木一丁目)
- ・フィールドワーク運営: 移動空間 PJ、メディアの UDPJ
- ・ディスカッション運営: 富士ゼロックス、富士ゼロックス総合教育研究所
- ・参加メンバー: アリゾナ州立大学、移動空間 PJ、メディアの UDPJ、富士ゼロックス

初日の9月1日(木)は、移動のワークショップを実施しました。

本ワークショップは、「第5回国際UD会議2014 in 福島&東京」での「東京ワークショップ」で移動空間 PJ とメディアの UDPJ が行った「公共空間の移動をしやすい情報について考えるワークショップ」をひな形として企画、実施しました。

午前中のフィールドワークでは、3 チームに分かれて有楽町駅から地下鉄で豊洲、豊洲からゆりかもめで新橋、新橋から都営バスで六本木一丁目へ移動しました。

アリゾナ州立大学のメンバーには色弱模擬フィルター(バリエントール)を配布し、手掛かりにしたサインや情報について、色弱の立場からの見え方を確かめながらフィールドワークを進めました。

午後は、富士ゼロックスの Future Center(東京・赤坂)でディスカッションを実施しました。

チームごとにフィールドワークを振り返って気づきの抽出と共有を実施し、最後に発表を行いました。

このディスカッションでは、「サインの位置(頭上、足元等)の適切さに対する視点」「地図間のスケールや向きの不一致」「赤が多用されているため色弱の場合に判別が困難なこと」「鉄道からバスへの乗り換え時に手掛かりとなる情報がないこと」「漢字の混じったバス系統番号の分かりにくさ」「バスの系統番号とバス停番号の紛らわしさ」「バス内での表示の見にくさ、多言語化の遅れ」などのメッセージが抽出されました。

また、アリゾナ州立大学の学生からは、「SOSの表示を初めてみた」という発言もあり、日本では国際的に理解されるとされている表示が、必ずしも通じないという発見もありました。

最後に今後に向けて、バスや鉄道での追加拡張情報(貼り紙等)も含めた多言語化の推進や、JR・メトロ・私鉄等の事業者間を超えた情報のつながり(サインシステムとデザインの統一)、乗換等の交通の継ぎ目での情報・サインの整備、旅行者向けの交通系 IC カードの整備などの提案がありました。



色弱模擬フィルター着用で移動



熱心にディスカッションする参加者

2 日目:ワーク/ライフワークショップ

- ・対象フィールド: コクヨ品川ライブオフィス、積水ハウス新宿ショールーム
- ・ディスカッション運営: 富士ゼロックス
- ・参加メンバー: アリゾナ州立大学、富士ゼロックス

2日目の9月2日(水)は、ワーク/ライフのワークショップを実施しました。

このワークショップでは、ワーク視点のフィールドワークの場をココヨ、ライフ視点のフィールドワークの場を積水ハウスが提供し、ディスカッションを含めた全体運営を富士ゼロックスが担当しました。

午前中のフィールドワークでは、ココヨの品川ライブオフィスと積水ハウスの新宿ショールームの視察を行いました。

ココヨのライブオフィスでは、フリーアドレス(社員が個々に机を持たないオフィススタイル)やガーデンを導入したオフィスで、デザイナーや営業、エンジニアなど様々な役割の社員の方々が実際に働いている姿を観察しながら、オフィスのデザインの狙いや効果についての質疑を行いました。

積水ハウスのショールームでは、「二世帯」「賃貸」「店舗」を併用した多機能4階建住宅を視察し、和室などの伝統的なしつらえとモダンなしつらえの共存、環境に配慮した素材の活用、段差のない室内や設備の角の丸みなどの配慮について、説明を受けながら観察と体験をし、質疑を行いました。



ガーデンオフィスで説明を受ける参加者



多機能4階建住宅を視察



様々な意見交換がなされた

午後は品川産業支援交流施設 SHIP(東京・大崎)で、3チームに分かれてディスカッションを行いました。

ワークの視点では、「人と人の距離」「オープン度の合いの適切さ」などについてディスカッションがなされました。

「オフィスのメンバー間の関係」「プロジェクトを超えたコミュニケーション」「個人スペースの確保、パーソナライズの方法」「上司と部下の関係」など、アメリカと日本の文化や考え方の違いも含めて、今後大切にすべきことに議論が及びました。

また、ライフの視点では、「段差を無くす」「引き戸にする」「設備の角を丸くする」などの多様性を考慮した設計のほか、「親世代と子世代の生活空間の距離感」「日本人は狭い所に落ち着きを感じるか」など、家族のコミュニケーションや世代間の関係と距離感、文化に関する議論も実施されました。

3日目: レジャー(観光)ワークショップ

- ・対象フィールド: 京都の寺院、神社、徒歩とバスでの移動
- ・フィールドワーク、ディスカッション企画運営: 京都工芸繊維大学久保研究室
- ・参加メンバー: アリゾナ州立大学、京都工芸繊維大学、富士ゼロックス

車イスで移動する参加者→



最終日の9月3日(木)は場所を京都に移し、レジャー(観光)のワークショップを行いました。

京都工芸繊維大学の久保雅義教授と研究室のメンバーが中心となって、フィールドワークとディスカッションを企画運営し、アリゾナ州立大学、京都工芸繊維大学、富士ゼロックスのメンバーが参加しました。

午前中のフィールドワークでは3チームに分かれ、北野天満宮-金閣寺、平安神宮-南禅寺、清水寺-八坂神社の観光と、その間の徒歩やバスでの移動をチームごとに実施しました。

さらに、このフィールドワークでは久保研究室が用意した高齢者疑似体験キット、車イス、妊婦疑似体験キットを併用することで、①高齢者②車イス利用者③外国人④妊婦の4つの視点を多様性のキーとして、観光や移動の課題を体感しました。

午後は京都工芸繊維大学(京都市)でチームごとのディスカッションを行い、最後には全体で集まって交流会と発表を行いました。

ディスカッションでは、それぞれがフィールドワークの中で体感した、「屋内外でのスロープや段差のない迂回ルートの有無」「多言語での案内図やサインの有無」「作法や歴史の解説が多言語化されていない」「多様性への配慮と伝統文化の保全のバランス」「寺社と神社の違い」などの気づきが抽出され、交流会の発表の場で共有されました。



高齢者疑似体験キット使用

多様性のある社会を創っていくために

本ワークショップでは、外国人の視点、企業の視点、学生の視点など、幅広いメンバーの参加により、文化の違いまで含めて、多様性について深く体感し、議論をすることができました。

2020年の東京オリンピック・パラリンピック、さらにその先の多様性のある社会を創っていくための基礎となるような議論をすることができたワークショップでした。

アリゾナ州立大学の学生たちからは、「公共の場所でのフィールドワークができたことがとてもよかった」「色弱の疑似体験により、共感をベースに今まで考えたことのない視点で考えていくことができる」「世界のオフィスの関心が、メンバー間のコミュニケーションや成長に向かっていくことが体感できた」「日本の伝統とモダンなしつらえを合わせた住宅を体験できた」「文化の視点を観光に取り入れて考えることができた」「IAUD研究部会と会員企業の専門家、京都工芸繊維大学の学生とともにディスカッションできたことがよかった」「調査や分析の手法が今後の自分たちのプロジェクトに役立つ」など、多くのポジティブな感想や意見が寄せられました。

一方で、「さらに深い観察や体験がしたい」などの意見もあり、今後の活動に反映していきたいと考えています。(了)



和やかに行われた交流会



IAUD アワード 2015 受賞紹介③

今号の Newsletter では、IAUD アワード 2015 金賞を受賞した 6 件のうち、4 件の取り組みをご紹介します。

機能とデザインに徹底的にこだわる

金賞 プロダクトデザイン部門:日本の暮らしに合わせた統一コンセプトの家電シリーズ「J コンセプト」/パナソニック株式会社

IAUD アワード 2015 審査委員長のロジャー・コールマン氏(英国王立芸術大学院名誉教授)は、「入念に調査を重ねたアプローチにより、使いやすさとシンプルさの点で本当に高齢者にやさしく、ライフスタイルに合わせたユニヴァーサルな家電を開発している。その結果、国際的に幅広い消費者に訴求する可能性のあるデザインになっている」と評価しました。

この取り組みをパナソニック(株)アプライアンス社デザインセンター企画部の平井伸佳氏に報告していただきます。

新しい統一コンセプトの家電シリーズ「Jコンセプト」

「Jコンセプト」は、これからの日本の暮らしに合わせた、使いやすい機能とこだわりのデザインをかたちにした、新しい統一コンセプトの家電シリーズです。

ユーザーの中でもとりわけモノを選ぶ目が厳しい、私たちが「目利き世代」と名付けた 50 代、60 代の方々の声に耳を傾け、お客様の困り事を徹底的に探索。使い勝手の細やかな配慮を、「現代の日本の暮らしにとけ込むシンプルで上質なデザイン」に仕上げました。

現在、「Jコンセプト」シリーズとして、エアコン、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、炊飯器、オーブンレンジを展開しています。



エアコン、冷蔵庫、洗濯機、掃除機、炊飯器、オーブンレンジからなる「Jコンセプト」シリーズ

日本の技術を結集した家電

Jコンセプトは、生活経験豊かな50代、60代の方々の声にしっかり耳を傾け、本当のお困り事を探り出し、それを解決する製品を作りたいという思いで、複数の部署、事業部を横断するプロジェクトを発足したことから始まりました。

2年の歳月をかけて、調査・検証と分析、アイデアディスカッションやプロトタイプ開発を繰り返すことで、今までに無い、機能とデザインに徹底的にこだわった、日本の技術を結集した家電を開発しました。

調査は30回以上、3万人以上のお客様の声に耳を傾けるとともに、専門家の方のご意見も伺い、使いやすさにも徹底的にこだわっています。

「Jコンセプト」シリーズ各商品のねらい エアコン



グランエアフォルム



室温みはり



フィルターお掃除ロボット

- ・夏は冷風を直接体にあてないやさしい風、冬は足元まで約35°Cのあたたかい風を届けるグランエアフォルム。
- ・複数のセンサーでお部屋の状況を見守り。夏場は高温・多湿の条件が続くと自動で運転をスタートする「室温みはり」を搭載。
- ・高所掃除の心配がないので安心な、フィルターお掃除ロボットを搭載。

冷蔵庫



ワンダフルオープン引き出し



ローウエスト



トップユニット構造

- ・100%全開できて、奥まで見渡せるワンダフルオープン引き出し。
- ・従来より約15cmドア棚を低くすることでペットボトル等が取り出しやすいローウエスト。
- ・コンプレッサーを移動し、取り出しやすくした「トップユニット」構造。

洗濯機



- ・凸凹が少なくお手入れしやすい「すっきりデザイン」。
- ・見やすい、押しやすい、大きな操作パネル。
- ・手前の高さを下げ、タンク底を上げることで取り出しやすさを向上。

掃除機



- ・素材の魅力を際立たせる、布で優しく包むかたち。
- ・新開発の小型軽量モーターや先端材料 PFRP により世界最軽量の本体質量 2.0kg を実現。
- ・効率よく掃除できるハウスダスト発見センサーと LED ナビライト。

炊飯器



- ・お手入れしやすい継ぎ目のないクリーンなフォルム。
- ・フルドット液晶採用で見やすく使いやすいシンプルな操作部。
- ・少量でも本格的な美味しさを実現する「可変圧力IHおどり炊き」を搭載。

オープンレンジ



50 の和食メニュー搭載 カラータッチ液晶とLED ボタン 合わせ技セットとエリア加熱

- ・焼き物・煮物・蒸し物・揚げ物の定番メニューが自動で手軽に調理できる 50 の和食メニューを搭載。
- ・大画面で迷わず操作できるカラータッチ液晶と、押すタイミングを光って知らせる LED ボタン。
- ・時短調理や少量調理に対応する「合わせ技セット」と「エリア加熱」。

和のエッセンスのあるシンプルで上質なデザイン

遠くから見ると日本の生活空間に調和し、近くで見ると前面にあしらわれた細やかな「和のエッセンスを取り入れた柄」がさりげない作り込みを見せる上質なデザインを目指しました。(了)



和のエッセンスを取り入れたシンプルで上質なデザインで統一



暮らしに溶け込むフォルム

機能と空間の美しさを兼ねた浴室用の新しい手すり

金賞 住宅設備部門:おきらく手すり / パナソニック株式会社

審査委員長は、「現代のバスルームにおいて見過ごされたり、不十分に対処されたりしがちな安全性に対して、シンプルでエレガントなソリューションを提供した。また、高齢化社会に対応した製品でもある」と評価しました。

この取り組みをパナソニック(株)ES社 デザインセンター デザインハウジング部の平尾尚郷氏に報告していただきます。

手すりと収納棚がひとつに

「おきらく手すり」は、手すりと棚がひとつになった、浴室用の新しい手すりです。

手すりとしては、洗い場での立ち座りや浴槽の出入りなど、浴室内の一連の動作をしっかりとサポートします。当社独自の評価手法を用い、「握りやすさ・使いやすさ」を解析し、デザインしました。

棚としては、手が届きやすい位置に小物類を置ける十分な収納量を確保しています。

また、高齢者向けの商品をイメージさせないシンプルなフラット形状にすることで、浴室空間に調和するデザインとなっています。

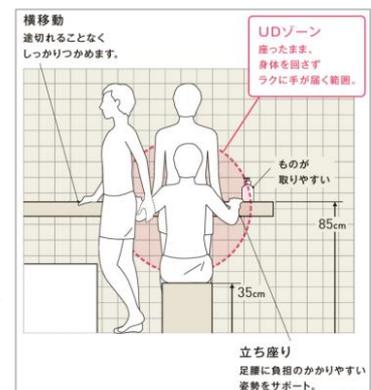


浴室空間に調和しているおきらく手すり

高齢者向けのイメージを払拭した浴室用手すりの提案

リフォーム世代である50～60代の方々は、今後への不安はあるものの、高齢者向けのイメージが強い手すりへの抵抗感を多くの方が持たれていました。

この手すりは空間に馴染む意匠にするとともに、収納としても手が届きやすい位置に十分な収納量を持たせることで、将来への備えとして積極的に手すりを取り入れやすくすることを目的とし、開発を行いました。

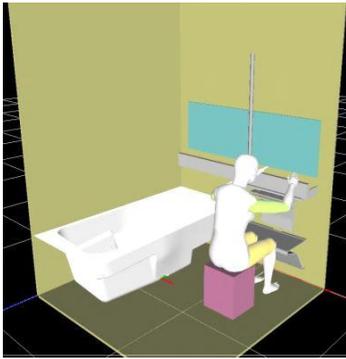


独自のデジタルヒューマン解析評価技術を駆使

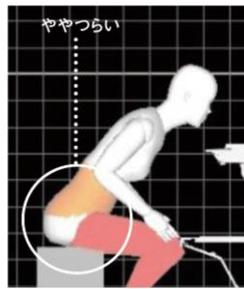
洗い場での立ち座り・移動や浴槽の出入りなど、一連の動作をしっかりとサポート出来るよう、当社独自の「デジタルヒューマン解析評価技術」により、動作をシミュレーションし、最適な設置位置を割り出しました。

1. 洗い場での立ち座り動作が楽にできること。

- ①腰の曲げが少なくてよい。
- ②身体を引き上げやすい。
- ③両手でしっかり支えられ安定させる。



立ち上がる場合



おきラク手すりの場合



2. 浴槽の出入りの際のまたぎ動作が安定して行なえること。

- ①腰の曲げを少なくする。
- ②ひざを高く上げなくてよい。
- ③移動する際、手が離れずに持てる。
- ④両手+足の3点で身体を支持できる。

手すりなし



前のめりになり、姿勢が不安定。

つらい やや負担あり (許容できる) ラク

おきラク手すり



上半身が起き上がり、身体が安定。

(身長160cmの場合、デジタルヒューマンによるシミュレーション)



3. しっかり握りやすく、伝え歩きも安全に行なえること。

- ①中指、薬指で握りこみ、手のひらの両サイドでしっかり支えられる。
- ②小指側の手のひらがバーに密着し、広い面積で支えられる。



指先でしっかり握り込めます。



両手でしっかりつかめます。

手をスライドさせやすい
平らな天面

握りやすさを
アップさせる
滑り止め

しっかりと
握り込める
形状

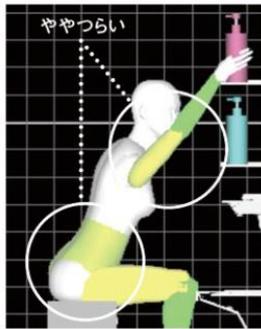
親指をかけて
力を込めやすくする
くぼみ

手が届きやすい位置に収納機能

収納も兼ねた手すりというコンセプトのもと、バスルームで使われる小物の収納のしやすさを評価分析し、座ったままでも手の届きやすい最適な位置や収納奥行きを導き出しました。

また、シャンプーやボディソープといった普段使いの小物は洗い場側に収納、美容家電等は浴槽側へ収納、といった入浴スタイルに合わせた収納計画を可能にしました。

縦型収納棚の場合



座ったままでも手の届きやすい最適な位置に

おきらく手すりの場合

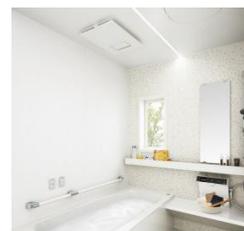


入浴スタイルに合わせた収納計画

インテリアに調和するデザイン

従来からの手すりは高齢者施設をイメージさせる機能特化させた補助具としての印象を強く持たれていました。

そこで空間に美しく納まるデザインとして、シンプルでフラットな形状と、お客様の好みのスタイルにコーディネートできる木目 3 柄、ホワイト色、ブラック色の展開で、インテリアに調和する商品に仕上げました。



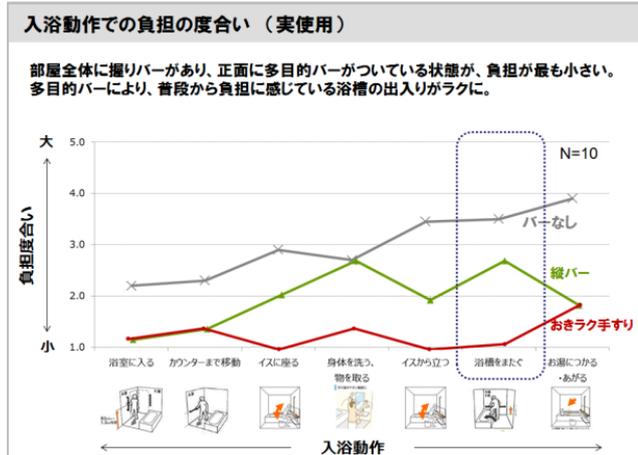
空間に美しく納まるデザイン

ユーザー検証でも高評価

65 歳以上の男女 10 名の方に、「バーなしタイプ」と従来からの「縦バータイプ」、そして「おきらく手すり」を使用していただき評価いただいたところ、「おきらく手すり」は入浴動作の負担感が減ったという結果が得られました。

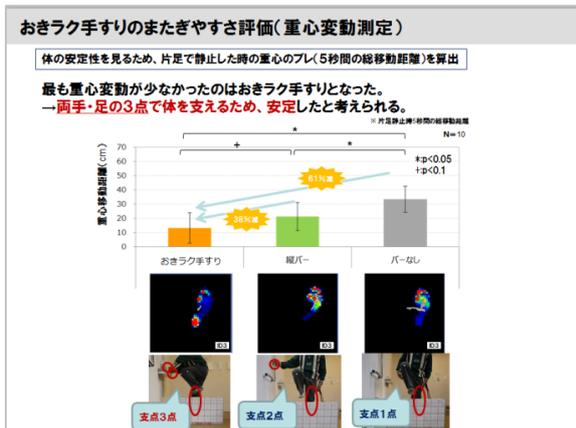


ユーザーによる検証の様子

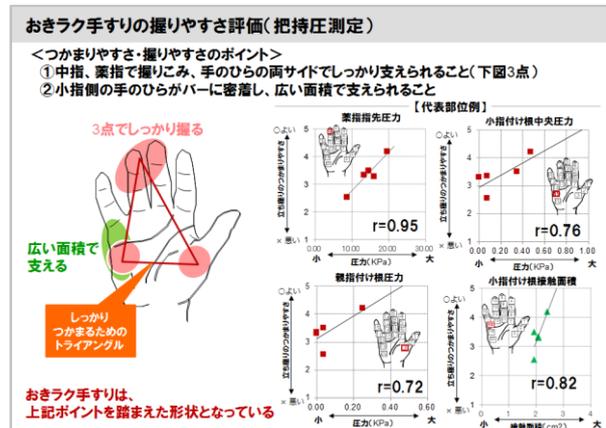


おきラク手すり、縦バー、バーなしでの動作負担の度合い

さらに、またぎやすさ(重心変動測定)では従来品に対して優位差が見られ、また把持圧測定をすることで、手すりの形状が握りやすさのポイントをおさえていることが検証できました。



重心変動測定により片足立ち時の重心のブレを算出



把持圧測定により握りやすさのポイントを把握

更に使いやすく人にやさしい商品を

10年、20年先でも快適にくつろげ、安心して使っていただけるバスルームにするため、実際に使われるお客様の声をお聞きし、もっと使いやすく、もっと暮らしに寄り添う人にやさしい商品を開発、ご提案していきたいと思ひます。(了)

誰にでも詳細で豊かな情報を提供する都市の立体展示

金賞 公共空間部門: Talking tactile model Berlin (音声対応ベルリン触地図)

／Technical University of Berlin (ドイツ: ベルリン工科大学)

審査委員長は、「触って感じることのできる都市模型の既存概念を、大きく拡大する革新的な作品。音声やアニメーションを加えることで、目の不自由な観光客にとって、基本的に動かない模型の価値が大きく高まる。さらに、共生的でユニヴァーサルな形でインタラクティブな体験を加えたことが、触地図の魅力を高めている」と評価しました。

この取り組みを、ベルリン工科大学のアネット・ミュラー氏に報告していただきます。

誰にでも楽しめる地図を目指して

私たちはベルリン州政府環境・都市開発局とバリアフリー計画調整局の委任を受け、4年間をかけて縮尺1:2000の音声対応ベルリン触地図を開発しました。

私たちの革新的なデザインおよび研究開発は、視覚障害者に立体を認識してもらうことに重点を置いています。

特に、視覚障害者のための補助装置に使用する素材に工夫を加え、障害を強調することなく、誰にでも楽しめる地図を目指しました。

研究過程においては、すべてのエンドユーザーに受け入れてもらえるよう、将来的な利用者に関する具体的な知識や経験を取り入れる方法を確立しました。

触地図は、視覚障害者が建築物や都市設計の特性を十分に理解できる唯一の手段です。私たちは触地図に、住民、旅行者、視覚障害者、聴覚障害者を問わず体験できるように、革新的な素材であるリアルな模造石や最新技術 RFID を使用しました。

それにより、デザインフォーオール (Design for all) に必要な多様性、機能性、知覚、美意識の基準を満たしています。

この地図により、誰でも都市の全体的な印象と詳細なアイデアの両方を把握できます。

RFID 技術 (電波を使った自動識別技術) と適切なソフトウェア、ハードウェアの採用により、情報を音声またはスマートフォン画面上の文章として持ち運び、重要地点 (POI) を訪ねることも可能です。



音声対応のベルリン市の触地図

開発プロセス初日からユーザー参加

私たちが取り組んでいるすべてのデザインフォーオールプロジェクトは、ベルリン工科大学建築学研究所モデル・デザイン部のセミナーやワークショップから誕生します。

デザインフォーオールプロジェクトには、開発プロセスの初日から視覚障害者が参加します。視覚障害者の体験や理解がプロジェクトの結果に不可欠であるだけでなく、エンドユーザーを受け入れるためにも、参加プロセス自体が非常に重要なものとなっています。

さらに、視覚障害者に接してその触覚に親しむことで、学生はバリアフリーの計画と建築プロセスの必要性を実感し、デザインフォーオールへの一般的な理解を深めることができます。

革新的な素材や最新技術を駆使

ほとんどの触地図は青銅鑄物を使用しており、高度に抽象化され、細部は表現されません。建築物の正確な形状は「見る人」に伝わらないままです。

そこで、私たちはドイツにある3つの視覚障害者団体との緊密な協力により、砂とエポキシ樹脂から成る新しい素材を開発しました。

この素材は、さまざまな表面の手触りや細部を再現でき、見た目が非常に美しく、温度と表面の手触りの点で石造建築の感覚も再現できます。また、水で洗えて耐久性も高くなっています。

また、ベルリンで人気の高い観光スポットについては、縮尺 1:2000 の触地図の所在地の真上に拡大模型を配置しています。

これは、訪問者にとって、都市のレイアウト内で物のサイズを理解でき、細部やデザインを体験できるシンプルで画期的な方法です。

さらに、オーストリアのヨアネウム応用科学大学との協力により、RFID 技術を使用して触地図に「音声」を加えることができました。このような試みは過去にありません。

この音声対応技術は、プロジェクトの要件に合わせて専用プログラムされました。触覚でわかる約 140 のポイントでは、RFID スキャナを使用して情報を取得できます。このシステムにより、視覚障害者はスマートフォンで情報を聞き、聴覚障害者はスマートフォンの画面で情報を読むことができます。

ドイツ語を話さない旅行者も、英語版の利用によって、有名な通り、広場、公共交通機関、文化的名所、観光スポットに関する情報を取得できます。

このように、「音声対応ベルリン触地図」プロジェクトは、視覚障害者の参加と協力している大学のノウハウがシナジーを生み出し、すべてのユーザーの生活の質を大きく向上させ、未来の建築家の教育に多大な影響を与えました。



所在地の真上に拡大模型を配置

デザインフォーオールプロジェクト一覧

私たちが取り組んでいるデザインフォーオールプロジェクトは以下のとおりです。

- ・国会議事堂の触覚模型(1:100)
- ・国会議事堂周辺エリアの触地図(1:1500)
- ・国会議事堂ドーム通路の触覚ガイド
- ・労働・社会政策省の触覚模型
- ・ベルリンの文化遺産として重要な建物へのバリアフリーアクセスの開発(移動展示用)
- ・2010年上海万博でのベルリンのプレゼンテーション「Close your eyes and see(目を閉じて見て)」
- ・エーベルバッハ修道院の触覚模型
- ・ムゼウムスインゼルにあるペルガモン博物館のすべての展示物の触覚模型
- ・ベルリン工科大学で行われているデザインフォーオール研究の実践(了)



国会議事堂ドーム通路の触覚ガイド

聴覚障害者の感覚に訴える空間と環境づくりのために

金賞 地域計画部門: Deaf Space Design Guidelines (デフ・スペース: 聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン) / Deaf Space Project (米国: デフ・スペースプロジェクト)

審査委員長は、「このデザイン・ガイドラインは、聴覚障害者や難聴者がどのように空間を体験しているかの具体的な理解を助けるもの。建築的空間と環境の社会的利用と認知に関する重要な問題を提起することにより、あらゆる年齢と能力の人々のために広く応用される可能性を秘めている」と評価しました。

この取り組みを、Deaf Space Project のヘンゼル・バウマン氏に報告していただきます。

聴覚障害者の体験と文化を理解するデフ・スペース

普段は音で体験しているのが見える空間、繊細な音を触れて感じる空間を想像してください。意識と呼ばれるこの空間では、日常体験が新たな意味を持ち、現代の生活でしばしば失われている自己感覚と場所感覚のリンクが再びつながります。

これは SF 小説に出てくる夢の空間ではなく、聴覚障害者の体験と文化を理解するためのデフ・スペースです。

より暮らしやすく持続可能な世界にするため、人間中心のアプローチを必要としている建築家にとって、デフ・スペースは貴重な教訓にあふれています。

そもそもデフ・スペースは、ろう者にとって視覚と触覚が空間に対する意識と順応の主な手段である、という単純な事実から出発しました。多くのろう者は、視覚と運動を使用したコミュニケーション手段として手話を利用し、鋭敏な感覚と共有される人生体験を通じて強い文化的アイデンティティを維持しています。

一般的に健聴者によって健聴者のために構築された環境は、独自の認知方法、言語、文化に合わせて周囲を変えてきた聴覚障害者にとって、驚くほど困難に満ちています。

共通利益をもたらすデザインソリューション

「デフ・スペース: 聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン」は、聴覚障害者の感覚に訴える空間と環境をつくるためのデザイン上の推奨事項をまとめたものです。

空間の社会的利用と知覚の切り離せない結びつきに深く根ざしたデフ・スペースは、普遍的な基準ではなく、特定の瞬間における特定の環境での特定の社会的相互作用という統合的な体験を根本的に重視しています。

「デフ・スペース: 聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン」は、聴覚障害者の感覚体験や文化的、個人的アイデンティティが建築物の形を決めることに新しい理解を提供し、利用や順応にとどまらず、ろう体験に美しく対応したり、ろう体験を表現したりするきっかけとなります。

本ガイドラインの目的は、共感的なデザインというアイデアを促進することにより、違いを尊重し、共通の利益をもたらすデザインソリューションを生み出すことです。

聴覚障害者がニーズに合わせて空間を変更する

私は 2005 年に先進的な聴覚障害者のグループに招かれ、ワシントン DC のギャローデット大学で建築とろう体験に関するワークショップの司会をしたことで、デフ・スペースとろう文化が建築家に与える教訓について初めて知りました。

ワークショップの冒頭で、聴覚障害を持つ参加者が、カンバセーションサークルに私が並べたばかりの備品を並べ直すのを、健聴の建築家として気まずい思いで眺めていたのを覚えています。

参加者が集まると、何人かがすぐに椅子を円形に動かし始めました。他の何人かは、全員が居心地良く、手話がよく見えることを互いに確認しつつ、窓のブラインド、照明、展示物を調節しました。

このようなカンバセーションサークルの作り方は、デフ・スペースの多くの例の 1 つにすぎません。これは、一般にろう文化の集産主義的性質と言われる典型的な社会空間表現です。

ろう者が集まれば、いつでも、どこでも、家庭でも、職場でも、レストランやバーなど公共の場でも、しばしばカンバセーションサークル作りは、「さあ、これがデフ・スペースだ」という共有認識で締めくくられます。

この最終的な承認により、参加者は、お互いや自分たちが存在する場所に対する愛着とつながりを確認するのです。

デフ・スペースの建築パターンを体系化

デフ・スペース・プロジェクトは、デフ・スペースの社会空間的表現を建築パターンとして体系化するため、ギャローデット大学の ASL(アメリカの手話)／ろう学部との協力で 2005 年に成立しました。

それ以来、100 以上の特徴的な建築パターンが、「空間と視覚言語」「順応」「文化的表現」という 3 つの経験的カテゴリに分類され、「デフ・スペース：聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン」の基盤となっています。



Student research: measuring visual interaction

Student design: creating spaces of Deaf culture

デフ・スペース・プロジェクトの活動が「聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン」へ

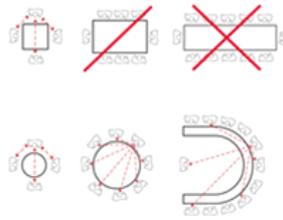
ガイドラインに記載されたデフ・スペース建築パターンは幅広く、手話空間や視認性を含む基本的な部屋の寸法、さまざまな人間の肌の色とコントラストを成す色、柔らかい間接照明などが含まれます。これらはすべて、手話を明確に見せ、目の疲れを軽減する工夫です。

また、感覚の到達範囲パターンは、建物の形状、材料、光、色が、他人の動きに関する視覚的、触覚的、振動的な手がかりを与え、人間の安全と幸福にとって不可欠な空間的位置感覚を生み出す仕組みを説明しています。

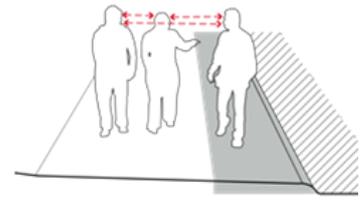
これらのパターンは、2015 年秋に発行された「デフ・スペース：聴覚障害者のためのデザイン・ガイドライン」に列記されています。



Color + Communication



Hearing vs. Deaf Seating



Wide sidewalk - Good

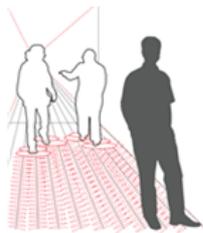
視覚的言語のためのデフ・スペース建築パターン

心地良く暮らしやすい環境づくりへ

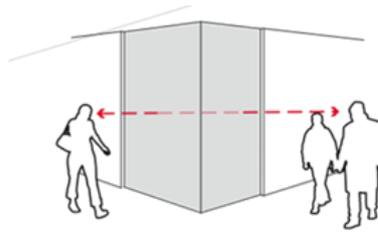
現代的なデザインや建設慣例があふれる中、私たちは人間が世界をどのように体験しているかという存在的な側面や、それが人間の幸福に与える影響を見失っています。

現代の生活が人間の集団的心理に強いストレスを与えている現在、感覚と情動を通じた本当の空間体験を取り戻すことが重要です。

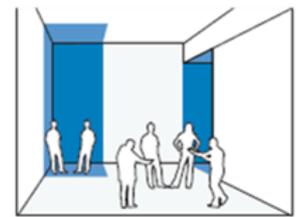
デフ・スペースは、空間、身体、集団的な幸福の関係の再発見を建築家に提案します。これは、部屋、建物、さらには都市のデザインに広く応用が可能です。



Vibration Zones



Transparent Corners

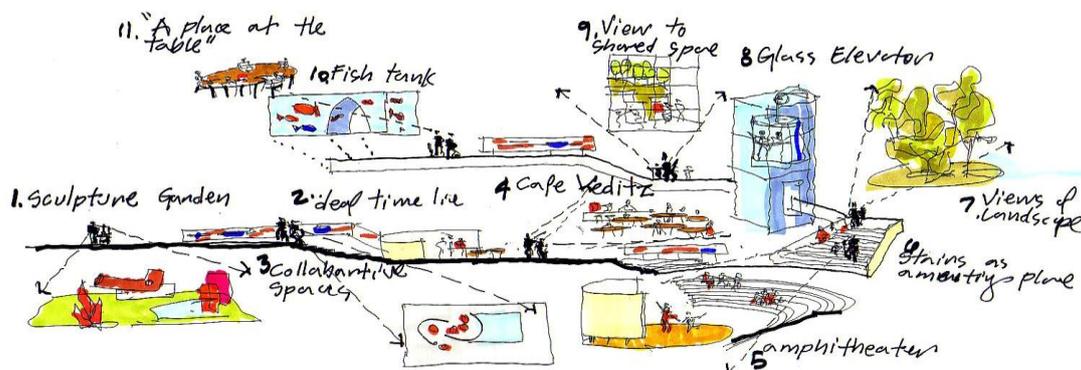


Color + Orientation

感覚の到達範囲を考慮したデフ・スペースの建築パターン

デフ・スペースの建築パターンは、聴覚障害者の独特の感覚に対応するものですが、あらゆる人々の感覚に訴え、心地良さを感じさせる暮らしやすい環境づくりにも活用できます。

さらにデフ・スペースは、聴覚障害者が聴覚を中心とした環境に継続的に違和感を抱き、それに創造的に対処する中で得た、共感的で統合された活動の形に、私たちの目と心を向けるきっかけをつくります。



A place of our own experiential map choreographs a journey through a space expressive of deaf experiences

ろう文化を表現するデフ・スペースの建築パターン

誰もが住みやすく持続可能な世界のために

建築家として、誰のために何をデザインする場合でも、異なる身体的、感覚的能力を持った人々が生まれ持つ空間的な知恵から多くを学ぶことができます。

デフ・スペースは、空間のさまざまな知覚方法をのぞく1つの明るい窓にすぎません。ここから得られる教訓を受け入れれば、私たちは、他人の創造的な可能性を見直し、自分が世界を知覚する方法に対する意識を改めることができます。

これは、誰にとっても住みやすく、持続可能な世界をつくるために、小さいかもしれませんが、必要な一歩です。(了)

※IAUD アワード 2015 大賞受賞の取り組みは、IAUD Newsletter vol.8 第9号と第10号をご覧ください。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1601/18-150000.php>

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1602/15-103639.php>

※IAUD アワード 2015 受賞結果はこちらをご覧ください。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1511/09-000000.php>

※IAUD アワード 2015 審査委員長からのメッセージ、審査講評はこちらをご覧ください。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1512/22-000001.php>

中部圏域からより質の高い UD 社会の実現を目指して 第6回国際 UD 会議 2016 プレイヴェント開催のご案内

2016年12月に開催いたします「第6回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2016」のプレイヴェントを、3月17日(木)に名古屋学芸大学(愛知県日進市)で開催いたします。

プレイヴェント午前中には UD 検定初級と中級試験を実施します。

午後には有識者による基調講演や特別セッションが行われる記念シンポジウムと、IAUD アワード 2015 表彰式・プレゼンテーションを実施します。

当日は IAUD 総裁の瑤子女王殿下、大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長にもご臨席を賜る予定です。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

※プレイヴェント詳細は下記をご覧ください。

<http://www.iaud.net/event/archives/1601/26-174623.php>

※第5回 UD 検定・中級検定試験は下記をご覧ください。

<http://www.iaud.net/event/archives/1602/08-110000.php>

※第11回 UD 検定・初級 講習会 & 検定試験は下記をご覧ください。

<http://www.iaud.net/event/archives/1602/08-100000.php>



第5回国際 UD 会議 2014 開会式
(東京・お台場)

月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3 15:00～ 情報交流センター @IAUD サロン	4 13:00～ 手話用語 SWG @IAUD サロン	5	6
7	8 9:30～ UD 検定中級 事前講習会 @NEC 東海支社	9	10	11	12	13
14	15	16 13:30～ 余暇の UDPJ @IAUD サロン	17 9:30～ UD 検定初級 講習会 & 検定試験 10:00～ UD 検定中級 検定試験 13:00～ 第6回国際UD会議 2016 プレイヴェント @名古屋学芸大学	18	19	20
21 振替休日	22	23	24 14:00～ 衣の UDPJ @IAUD サロン	25 13:00～ 標準化研究 WG @iAUD サロン	26	27
28 15:00～ ワークスタイル PJ@IAUD サロン	29 16:00～ 評議員会 @NEC 本社ビル	30	31 15:00～ 住空間 PJ @積水ハウス			

次号は4月上旬発行予定

特集: 第6回国際UD会議 2016 プレイヴェント開催報告

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター (IAUD サロン) :
〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル4 階
電話 : 03-5541-5846 FAX : 03-5541-5847 e-mail : info@iaud.net